会派視察　報告

（会派　　政進クラブ）

＜視察目的＞

・石川県白山市

〈株式会社アクトリー本社〉

廃棄物処理の必要性とエネルギーまた街づくりの考えを参考にするため。

・栃木県下都賀郡

〈株式会社アクトリーR&D センター〉

廃棄物処理を利用したエネルギーの活用方法を参考にするため。

・埼玉県久喜市

〈株式会社ショーモン〉

地域の中での廃棄物処理施設の役割を参考にするため。

＜視察概要一覧＞

視察月日	視察先	視察施設	視察内容
1 月 22 日（水）	石川県白山市	株式会社アクトリー本社	廃棄物処理の必要性とエネルギーまた街づくりの考えについて。
1 月 23 日（木）	栃木県下都賀郡	株式会社アクトリー R&D センター	廃棄物処理を利用したエネルギーの活用方法について。
1 月 24 日（金）	埼玉県久喜市	株式会社ショーモン	地域の中での廃棄物処理施設の役割について。

＜視察概要報告＞

１．石川県白山市　　株式会社アクトリー本社

●対応部署：　株式会社アクトリー　専務取締役

取締役

室長

●説明概要：　廃棄物処理の必要性とエネルギーまた街づくりの考えについて。

＜考　察＞　飯橋由久

〈株式会社アクトリー本社〉

　株式会社アクトリーはオーダーメイドの産業廃棄物処理プラントを製造しているメーカーで、焼却炉本体を製造するための国内工場を持つ唯一のメーカーでもある。その分野の中でトップシェアを有するリーディングカンパニーとして、社屋の中には廃棄物処分時に発生する物質がどういった過程で、どのように発生するかを分析・予測するためにあらゆる研究室が設けてある。

　直近未来を見据えて、地球温暖化防止や地域防災拠点化などの社会貢献にも非常に積極的で、いわゆる廃棄物処分だけにとらわれていない社風に感心した。

　近年では、廃棄物処理プラントに植物と再生可能エネルギーを組み込んだ新しい「自然共生型環境プラント」の実現に向けている。

　安来市は現在、産業廃棄物処理施設を保持していないが、視察・説明を聞き、このような処理施設が将来必要になってくるのではないか、また雇用など地域発展に繋がるのではないかと強く感じた。

＜考　察＞　岩崎勉

　現在安来市は可燃ごみ処理施設運営事業として毎年約３億円程度の予算を充てているが、各自治体から排出される可燃ごみは、基本的には自治体か広域行政組合で処理するものと考える。本市の場合は過去の様々な経緯により、鳥取県の民間処理施設で焼却処分をお願いしているが、いつまでもゴミ処理負担を他県の皆様にお世話になっていることに批判の声もある。

　しかしながら現状の本市の財政状況では公設のゴミ処理施設を設けることは不可能なため、民設民営で可燃ごみ処理を市内で行えれば、雇用の場も生まれ固定資産税収入も見込まれることから検討の余地があると考え再度、環境関連プラントメーカーを視察し、ごみ処理の運営実態等についてメーカーとしての現実的な意見を伺った。

　同社は産学官共同研究の試みとして、再生可能エネルギー研究センターで電気と熱を供給できる複合型エネルギー供給システムの研究によるエコビレッジ構想を掲げるとともに、変化し続ける処理対象物の発熱量、元素分析、重金属の溶出試験などを測定する研究棟を併設するなど、ごみ焼却炉を中心に街づくりを考える会社でもあった。

　そのため、今の安来市から排出される可燃ごみの量からすると、今回視察したアクトリー本社が掲げている「複合型エネルギー供給システムの研究によるエコビレッジ構想」には程遠いため、先ずは民設民営で経営できる規模のプラント

から始めることになると思うが、その前段として現在お世話になっている関連企業の皆様への計画的で丁寧な説明から始めなければならないと感じた。

＜考　察＞　永田巳好

株式会社アクトリーさんは産業廃棄物処理のプラントを自社で企画、設計、製造、施工、メンテナンスまでを一貫して受けることが出来るプラントのメーカーさんである。製造を手掛けるメーカーは国内では希少な存在であり、産業廃棄物処理プラントの設備はもちろん環境、衛生、コスト面と、産業廃棄物分野でのリーディングカンパニーであります。また、廃棄物を資源として捉え、エコビレッジ未来構想として循環型社会の形成に向けて常に社会に貢献することに取り組まれている。事業の実現のために産、学，官の連携で環境、エネルギー様々な方面での利用を研究し、農業、漁業分野では活用が進められている。エネルギーの地産地消、また循環型社会の形成ではリーディングカンパニーとしての存在を十分理解させていただきました。

＜考　察＞　葉田茂美

この度の行政視察した（株）アクトリーは産業廃棄物処理プラントの開発と製造するメーカーで石川県白山市の本社と工場を視察した。本社では数々の精度の高い廃棄物処理プラントの研究、開発のオフィス、工場では独自のブロック工法と呼ばれる工法でプラントをブロック化して製造し現地に運び組み立てする方法で処理施設の建設し、またプラントの企画、設計、製造、据付、試運転、アフターサービスまで自社一貫ラインで行うという。説明では創業以来、環境問題に取り組み、廃棄物処理施設の役割とＳＤＧｓと結び付けて廃棄物処理過程で発生する熱を利用し発電も可能としているそのために再生可能エネルギー研究センターを自社で設け、太陽光発電のみならず熱とエネルギーを利用しＣＯ２を輩出しない温室栽培などの研究されている。将来、自社が目指す産業廃棄物処理施設は地域の防災拠点化として耐震構造はじめ、入浴施設、冷暖房化、電力供給等を完備させ地域に貢献したいとのこと。現在、産業廃棄物処理業者像が変化してきており、廃棄物処理業は再生資源供給業と考えるなど環境保全に（株）アクトリーの高い企業理念を伺うことが出来た。

＜考　察＞　福井加代子

廃棄物いわゆるゴミを資源にするという発想。そして処理過程で発生する熱

源から様々なエネルギーを創出し、街の全てに供給する社会。今や、一昔前のゴミではなく、廃棄物処理業は再生資源供給業へと変化している。アクトリーさんの想い描かれる未来の姿を垣間見ることが出来た。

＜考　察＞　湯浅正志

当社は、「自然共生型環境プラント」の実現に向けた産業廃棄物向け焼却炉をはじめとする各種環境関連処理プラントを自社一貫で全てを請け負うプラントメーカーであり、自社の研究棟で処理対象物の分析、溶出試験などを測定しプラント設計にフィードバックさせ、プロセス・機械・電気設計を行い、製造・据付、試運転、最も重要であるアフターサービスまで全てを一貫して行っている。

廃棄物政策を正確に捉え、エネルギー分野や食糧分野など様々な研究開発にも積極的に取り組み、地球環境を守るために高い意識を持ち、また、社会貢献など企業の社会的責任（CSR）にも積極的に取り組む姿勢には感心した。

現在、安来市には産業廃棄物処理施設は無く今回の視察説明を受け、今後気象変動による自然災害等にも対応が出来、地域貢献と雇用創出に繋がるこの様な施設が必要であると思う。

＜考　察＞　三原哲郎

石川県白山市に本社を構える株式会社アクトリーは、環境保全と産業廃棄物処理の分野で国内トップのリーディングカンパニーです。本社の建物は「自然との共生」のテーマで、洗練されたデザインで、オフィス環境は、開放感がありながらも機能的なレイアウトが施されていた。スペースの配置が工夫されており、開放感があり社員同士のコミュニケーションを活性化させる設計となっていました。

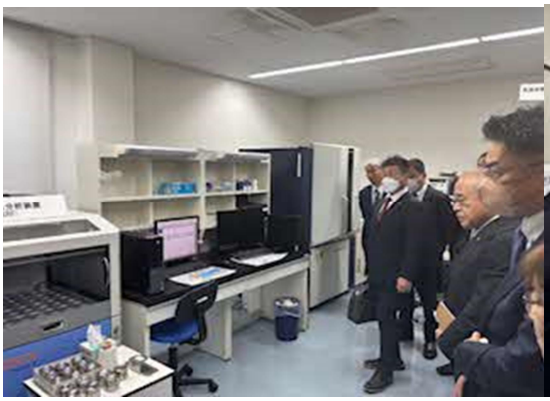
廃棄物処理プラントの設計、製造、据え付け、試運転、アフターサービスまで、全てを一貫して手がけ、廃棄物を資源にしたエネルギー創出プラントが街の中心にある「エコビレッジ未来構想」を描き社会に先駆けて高度な循環型社会の構築を目指して研究を進めており、廃棄物処理から創出したエネルギーを産・学・官が連携し、地域に供給することで社会を活性化していくことを目指しています。

この廃棄物処理プラントは、安来市再生可能エネルギー地産地消ビジョンの中で、2030 年の目指すビジョンとしても検討するべきだと感じました。また将来的に、施設導入となった際には株式会社プロテリアルをはじめ市内各企業と

の技術提携なども併せて考えられます。

＜考　察＞　内田卓実

　株式会社アクトリーさんは、産業廃廃棄物処理プラントを設計、製造、メンテナンス、アフターまですべてを請け負う業界トップの企業さんであった。廃棄物を資源ととらえ、環境、エネルギー、またリサイクルと循環型社会を形成するエコビレッジ未来構想を描かれ、産、学、管の連携で環境に配慮されたまさしく業界のリーディングカンパニーでありました。トラブルまた、稼働停止などを最小限に抑えることで地域の生活、環境に影響を与えることが無いように焼却物から焼却後の灰まで分析することで、安心、信頼を得ておられることがよくわかりました。



2　栃木県下都賀郡　〈株式会社アクトリーR&D センター〉

●対応部署：株式会社アクトリーR&D センター取締役センター長

課長

株式会社アクトリー　　室長

●説明概要：　廃棄物処理を利用したエネルギーの活用方法について。

＜考　察＞飯橋由久

〈株式会社アクトリーR&D センター〉

アクトリーR&D センターは株式会社アクトリーが直営で建設、運営している産業廃棄物処理プラントである。この施設は一般的に、我々住民が必要としないもの、いわゆる「ゴミ」や「廃棄物」をただ処分するだけでなく、その処分によって発生する熱を利用して発電などに生かす他、製造業・自動車産業から排出される鉱物性廃油を回収して再生したり、焼却炉の燃焼に関する実証・研究開発事業なども手掛けている。ごみ焼却時に発生する余熱を利用して発電を行い施設内のすべての電力を賄っているとの事である。

施設はいつでも見学できる体制を整えており、廃棄物の処理工程などを地域住民の方々に説明するショールームとしての機能も持ち、前述のごみ焼却時に発生する余熱を利用して敷地内に農業施設も建設している。このように環境に対する飽くなき取り組み、地域住民との関りなどをとても大切にする姿勢に改めて感心、感動した。

＜考　察＞　岩崎勉

Ｒ＆Dセンターは、株式会社アクトリー本社の次世代焼却炉の研究を目的に2004年に開設され、その目的を達成するため四つの機能を備えていた。

一つ目として、廃棄物の適正処理工程などを含めた焼却発電施設の操業を実際に様々な角度から見学するための「ショールーム機能」。二つ目に、施設点検、補修工事による操業停止の間、処理できない廃棄物の一時代替処理が可能なことと、自治体運用の廃棄物の代替処理ができる「代替受入機能」。三つ目に、新たに焼却事業に参入するユーザーのために研修センターとしてオペレーション及びメンテナンスのトレーニングを行う「トレーニングセンター機能」。四つ目として、廃棄物処理関連技術に加え、高効率な水素製造、食料需要など多岐にわたる研究でエコビレッジ構想の実現を目指す「研究・開発機能」。

このＲ＆Dセンターでは、まさにその四つの機能が発揮されており、近年頻発する自然災害ゴミの処理では、近隣自治で発生した水害ゴミを代替機能で処理を実施。熱エネルギーの活用技術によって野菜類・魚類養殖を手掛けていた。

本市が近い将来に導入できるレベルではないものの、市民にとっては厄介な存在となる各種ゴミを適切に処理することで社会に貢献できる「複合型エネルギー供給システムの研究によるエコビレッジ構想」を体験できた有意義な視察であった。

＜考　察＞　永田巳好

アクトリーR&Dセンターは、アクトリーの描く廃棄物を資源とする、循環型社会の形成エコビレッジ構想を実現するため設備から研究施設まで備えている施設である。廃棄物処理時に発生するエネルギーを,利用してトマトなどの農産物の栽培、フグなどの養殖事業などを試験的に進められている。フグの養殖は温水を利用することで成魚にまで生育する時間が短縮されるそうです。今後、農業、漁業、その他の産業にもエネルギーとして使用できるように研究が進められています。焼却設備は廃棄物の状態に応じて対応できるだけの設備を備えておられ、東日本大震災時は受け入れ可能な限りの災害で出た廃棄物を受け入れられたそうである。大規模な災害が発生した場合、災害廃棄物もかなり発生すると思われます。処理が遅れる事での感染症など衛生面での問題が出てくるリスクも高くなります。そのために焼却施設は重要な役割をすることがよくわかりました。

＜考　察＞　葉田茂美

２００４年次世代焼却炉の研究を目的に栃木県壬生町に開設され、当初製造業、自動車産業等からから排出される鉱物性廃油を回収、再生して製造される製造販売する。２０１５年焼却施設１号炉、2 号炉が完成。焼却炉の燃焼に関する実証・研究開発事業開始。焼却から得られる熱エネルギーで発電及び売電開始。現在、大型焼却施設３号炉で一般廃棄物をメインに焼却処理を実施。１日の処理能力は 3 炉併せて 394 ㌧／日、1 時間の発電量は５．１６０ｋｗｈという説明を受けた。また焼却施設から発生する排熱を利用した農産物のハウス栽培、魚貝類の陸上養殖などの研究開発にも力を入れており、センター内の施設の水槽でトラフグが養殖されている様子も見学する。

＜考　察＞　福井加代子

更にごみ発電所の無人化、脱炭素化そして地域への資源、エネルギーの供給源としての研究開発の場となるのがアクトリーR&D センター。エコビレッジ構想の研究開発実践型プラントとして焼却処理困難物などの処理方法の確立、焼却炉から得られるエネルギーの有効活用などの研究開発で、このプラントの処理能力は 1 日 400 トンで国内最大級であり、この分野に於いて、自分の所が一番という自信も圧巻だった。そして新たな産業創出への試みとしてアワビの養殖、トマトの生産、プラントで創出した電力を利用して陶器も焼く。これが全てゴミからのスタートで、アクトリーの最高の夢だと感じた。

＜考　察＞　湯浅正志

当施設は、アクトリー社が廃棄物処理から創出したエネルギーを産官学が連携し「エコビレッジ構想」の実践を行う研究施設でもあり、ショールーム機能、代替受入機能、トレーニングセンター機能、研究・開発機能を有する焼却発電事業、再製油事業も行う廃棄物焼却処理施設であった。

この施設では、地域貢献・未来のために子どもたちへの教育文化貢献と地域に密着しながら運営を行い、廃熱利用によるトマトのハウス栽培、漁業への参入として飼育槽ではアワビ・フグが養殖され、新たな産業創出の研究がなされ、私の廃棄物処理施設に対する概念が大きくかわった。今後求められる施設は、この様な思想を基にした施設が必要である。

＜考　察＞　三原哲郎

株式会社アクトリーが2004年に開設したR&Dセンターは、産業廃棄物処理技術や環境保全の分野での研究開発拠点として、焼却施設から得られるエネルギーの有効活用などの研究開発を、実際にプラントを稼働させて行なっています。

施設は以下の4つの機能があります。

1. 企業や地域住民の方々に廃棄物の適正処理工程などを見学できるショールーム機能
2. 施設ユーザーの操業停止の際の代替受入機能
3. 新たに焼却事業に参入するユーザーのための研修センター機能
4. 熱エネルギーの活用技術やAIによる無人化、CO2の分離回収、水素製造、食糧需給などの研究開発機能

廃棄物を燃やす際に発生する「熱エネルギー」から電気を作り、環境プラントでは、排熱ボイラ・蒸気タービン・発電機の発電ユニットを併設し、廃棄物処理による環境負荷やランニングコストを低く抑え、プラントで使用する電力はもちろん、地域への電力供給も可能とのことであり、1時間の発電量は5,160kWhで約13,000世帯分の供給量があるとのことでありました。また塗料やカーペットなどの多目的処理もやっています。

安来市も1市でプラントを開設するのは相当ハードルが高いと思われますが、県や周辺自治体など共同で運用するなど検討すべきだと考えます。

R&Dセンターは焼却施設から供給された廃熱を利用し、トマトをはじめ農産物のハウス栽培やアワビやトラフグなどの陸上養殖なども行なっています。

一番印象に残ったのは、フグは温水で育てると1年で出荷できるとのことでした。一般的にチョウザメなどは出荷するのに5年程度かかりますが、安来どじょうも温水で育てる養殖の実証実験をしてみるべきだと考えます。今現在は大きなどじょうは骨が固く、フォーゲルパークなどに出荷し動物のエサになっているとのことですが、温水で育てると大きくても柔らかいどじょうに育つのではないかと想像でき、将来は食用に出荷できるのではないかと思います。

現在、安来市内には複数の温泉の源泉があり、将来的にはこの熱を利用したハウス栽培はもちろん、漁業も目指せます。

小中学校適正配置計画で、学校の統合により空き校舎の再利用もできるのではないでしょうか。

＜考　察＞　内田卓実

アクトリーR&Dセンターさんは、廃棄物を資源とする、循環型社会の形成エコビレッジ構想を実現するためにアクトリーさんの技術がすべて詰まった施設

である。廃棄物処理時に発生するエネルギーを,利用してトマトなどの農産物の栽培、フグなどの養殖事業などを試験的に進められ、農業、養殖事業、その他の産業にもエネルギーとして供給できるように研究が進められています。焼却設備は廃棄物の状態に応じて対応できるだけの設備を備えておられ、災害廃棄物の処理も迅速に対応できる。また、壬生町と協定を結び施設から出る熱を利用したお風呂なども提供できるそうである。地域住民と共存している施設だけではなく、地域の安心の基盤の一つとしての施設として役割を担っていることがよくわかった。

3　埼玉県久喜市　〈株式会社ショーモン〉

●対応部署：株式会社ショーモン　取締役
副社長
営業部　担当

●説明概要：　地域の中での廃棄物処理施設の役割について。

＜考　察＞　飯橋由久

〈株式会社ショーモン〉

株式会社ショーモン・ミッションランドは廃棄物処理を行っている民間業者である。施設は株式会社アクトリーがオーダーメイドによって建てられており、アクトリー社の技術の粋を集めて建てられたと紹介を受けた。

主に産業廃棄物を取り扱っており、医療系廃棄物や液体も焼却処理ができる施設で、特に医療系廃棄物に至っては、不慮の事故により人体への感染を防ぐために一切人力を使わず、全て機械化され保管、移動、焼却まで行っている。

アクトリーR&Dセンターと同様ゴミを燃やすエネルギーから発電も行っており、できたエネルギーで工場内の電力もすべてではないが賄っているそうである。ショーモン社もアクトリー社もいずれも、廃棄物を処理するだけでなく、地球環境、地域環境、地域との関りを非常に大切にされており、処理施設と聞くだけで、敬遠されるのではないかと考える我々の方が間違った解釈をしており、我々の方がもっと環境について考え学ばなければならないと強く感じた。

＜考　察＞　岩崎勉

株式会社アクトリーのプラントを実際に導入・稼働させ中間処理施設として産業廃棄物処理業や収集運搬業等の各種の許可を取得し、その有資格者もしっかりと配置し事業を展開する事業所を視察した。ここは単なる廃棄物処理業者ではなく、環境に貢献する産業を手がけているという自負を持ちながら「この会社に頼めば、それだけで環境対策になる」。そうした厚い信頼を得たいと考えている企業とのこと。

説明を受けた会議室には、自治体、教育機関、福祉団体、国家機関等からの感謝状が飾ってあり、社会貢献にも力を入れていることがうかがえた。私は、地元の自治会や住民の皆さんとの関係について関心があったので、そこのところを伺ってみると「元々が工業団地内に建設したこともあり、建設にあたっての地元住民の皆さんからの反対運動はなかった」。「時々、『臭いがする』との苦情電話がかかってくるが、同一工業団地内にもう一カ所産廃処理業者があることもあ

り、弊社の稼働状況を確認して適切に対応している」。「アクトリーのプラントには自信を持っている」といった回答を得た。

また、二つの高速道路ＩＣから車で約 10 分の恵まれた立地条件から、首都圏を含め関東一円や東北地方で発生した廃棄物を高速道路で運搬し、焼却も破砕も出来る中間処理施設として稼働していた。安来市で同様の事業が成立するかは分からないが、仮に事業を行うのであれば、中海圏域は勿論、山陽方面からも廃棄物を効率的に運搬できるＩＣ周辺になるであろうと思料した。その意味でも、より多くの一般廃棄物、産業廃棄物、災害廃棄物を運搬し焼却・破砕することで「ゴミで稼ぐ」を具現化している好例を視察できた。

＜考　察＞　永田巳好

株式会社ショーモンさんはアクトリーの技術が集結された廃棄物処理施設でありました。工業団地内の一施設として操業されており、工場内は匂いなど全くない状態で、正門の横には現在の発電量が表示されていました。廃棄物処理施設は人、企業などが集まるところから離れた所にあるイメージを持っていましたが、周辺の工業団地の一員としての存在感、また、周辺には住宅街などあり、地域の人たちに認められここの一員として役割を十分満たしていることがよくわかりました。医療系廃棄物の焼却施設を見学させて頂きましたが、搬入から焼却まで人が触れることなく作業が完了するところなど、労働環境も含めた作業者への安全衛生対策、ドラム缶に閉じ込めて焼却することでの感染拡大防止対策として有効であると思います。また、二種類の焼却施設を持つことで災害発生時には災害廃棄物処理も含め久喜市の方と協定を結ばれ地域に貢献されていた。ショーモンさんは、地域の一員としてだけではなく、地域に必要な企業であることがよくわかる視察でありました。

＜考　察＞　葉田茂美

（株）ショーモンは埼玉県久喜市にあり、（株）アクトリーの廃棄物処理プラントを使用した産業廃棄物処理施設であり処理稼働中の施設を視察した。この施設では一般的な産業廃棄物から汚泥処理、廃油、感染性廃棄物（医療廃棄物）などが処理されていた。２０２２年には所在地である久喜市と災害廃棄物の処理の協力に関する協定を締結し、有事の際には廃棄物の運搬や処理ができるなど久喜市などと協力して復旧活動ができ、自治体にも大いに貢献する企業であると認識した。工場内では安全対策や清掃にも徹底しており快適な作業環境が整えられていた。

この度の視察では次世代焼却炉処理施設の稼働状況を視察することにより、今後の処理施設在り方と温室効果ガス削減など企業として、環境保全に対する考え方を研修することが出来、有意義な行政視察ができた。

＜考　察＞　福井加代子

単なる産業廃棄物処理業者ではなく、環境に貢献しているということと清潔に保たれた会社であると自負しているという説明だったが、社会問題となっているゴミ、それを資源にするというこの会社の存在自体に拍手を送りたい。そして一番に感じたことは出迎えて下さった方のほとんどが女性の方、案内から説明、質問に対応して下さった方も女性、同席の方も営業の女性の方、いわゆる3K 企業だと思うが女性が働きやすい職場であることに非常に興味を持った。

＜考　察＞　湯浅正志

株式会社ショーモン「ミッションランド」は廃棄物を焼却・破砕が行える中間処理施設で、アクトリー社の 2 種類のプラントによる技術を駆使した設備を稼働する企業であることから、視察をさせて頂く。

視察場所に到着し、車を降りた第一印象は悪臭が全く無く、廃棄物運搬車両の搬入路も汚れが無い事であった。敷地内の作業水は全て焼却に使用するための排水路施設も完備され、匂い・汚水・汚泥の場外への流出を防げる施設となっている。

特に、医療系廃棄物の処理については密閉型の特定容器で搬入し、搬入口から燃焼室投入口まで自動で搬送され容器ごと投入焼却されるため、作業時の感染予防を防ぐ対策も充実している。

今回の視察を通し、中間処理施設は廃棄物の処理だけではなく、循環・地球環境・地域コミュニティ、災害時協力等の想定が出来る施設でなければならない事を実感した。また、これまでの焼却施設は人目に付かない場所へ建設する事が一般的であったが、Ｒ＆Ｄセンター・ミッションランド伴に工業団地内に有り、その周辺には民家が点在している状況から迷惑施設と言われる概念は覆された。

＜考　察＞　三原哲郎

株式会社ショーモンミッションランドは、正門にはオリーブの木があり、英語では Mission Olive=使命を表し、ミッションランドはこの木の成長と共に多くの使命を達成できるように命名されていました。

廃棄物の処理を行う最新鋭の設備を備えており、焼却も破砕もできる工場で、臭気対策、汚水管理、粉塵対策など徹底した環境への配慮と効率的な廃棄物処理を両立させています。

1. 廃棄物処理能力
   缶詰やペットボトルの内容物と容器を専用機械で分離し、リサイクルと焼却を効率的に行なっています。
2. ドラム缶投入機
   液体や中身の入ったビンなどの廃棄物が入ったドラム缶を、自動化された投入機で安全に処理をしています。
3. 感染性医療用廃棄物処理
   専用の容器で医療廃棄物を安全に処理しています。
4. 焼却設備と発電
   ゴミを燃やした際に出る熱を利用した発電設備を併設しています。

以上の処理能力から、持続可能な社会の実現に貢献していると強く感じました。

このような施設を開設するには、行政が設置するより民間が建設した方が安く上がるようであります。施設を置くことによっての、ゴミのリサイクル、リユース、発電などプラスαがあることから、総務省からの 1/3 の補助金など利用し、民間業者にも積極的に誘致すべきであると感じました。

＜考　察＞　内田卓実

株式会社ショーモンを視察させていただくにあたり、まず廃棄物処理施設が工業団地の中心にあることに驚きました。臭いなど近隣に迷惑をかけること、また、焼却施設であるためトラブル時に公害などの心配があるのではと考えるが、ショーモンさんはアクトリーの技術が集結された施設であり、この地域の一員として貢献している企業であることを周りの企業さん、住民の方がよく分かっておられることが理解できました。医療系廃棄物焼却処理はドラム缶に詰められた廃棄物が焼却炉に投入されるまで一切人の手を掛けずに処理できるところは感染症など衛生面でも作業する人にまでに配慮され、環境また、施設内で働く人も含め、人に対して優しい企業であることがうかがえた。産業廃棄物処理に対しての考え方が変わりました。

株式会社 ショーモン フロー図面